

秋野豊筑波大学助教授

第5回報告会 講演録

ロシアおよびCIS諸国のゆくえ



1996年4月18日（木）

於新橋第一ホテル

主催 笹川平和財団



目 次

第一部 秋野助教授の講演	1
国境を渡る	1
器と中身のすれ.....	1
石油問題	3
旧ソ連の復活.....	4
国境警備の穴.....	5
グルジアの動き	7
CISの消滅.....	8
ロシア極東問題.....	8
モンゴル	10
コーカサス.....	11
ロシアの報復.....	12
第二部 質疑応答	14

秋野豊助教授プロフィール

1950年生まれ

早稲田大学政治経済学部卒業

北海道大学法学部修士 北海道大学博士課程修了（法学博士）

北大法学部助手、英国国費留学生としてロンドン大学に学ぶ

在モスクワ大使館でソビエト外交政策調査員

現在、筑波大学助教授

1992年9月より東西研究所のヨーロピアン・センター（在プラハ）主任研究員

1994年4月帰国

第一部 秋野助教授の講演

国境を渡る

私のやっていることはひとことで言えば国境を足で渡るということです。ソ連は15の国に分かれましたが、めざすはその国境です。飛行機で行き来するのでは何も見えてきません。汽車でもいいのですが、手続きが簡素なのであまり見えません。そこを無理に車で、できれば歩いて渡るわけです。多くの場合、ヒッチハイクや白タク、バスで通りますが、パスポートコントロールがどれぐらいあるのか、国境のすぐそばにポストがあるのか、兵士はロシア人か、税務官はどうか、どれぐらい賄賂を要求するのか……などなどを知るのです。

15に分かれた国がどれぐらい独立国になろうとして、どれぐらいが事実上独立を放棄しているのか、2年間あちこちを渡り歩くとそれがわかってきます。もっといい方法として、手間とリスクはかかりますがビザを持たずに行くという方法があります。ロシアのビザだけを持ってある国に入ろうとすると必ずそこで摩擦が起きますが、何とか入れるものです。どうしても入れなかったり、追われたりというのは3回程度です。ビザなしで入ったこともかなりあります。私のパスポートを見ると入国の記録がなくて、出国だけの国がいくつかあります。ともかく、まだ国が形成期なのでよくわからないところが多くあります。

もう1つ私がしてきたことは、旧ソ連の世界とその隣接の世界、特に西側、極東、南側、東側の地域がどう守られているのかということを見てきました。たとえばアゼルバイジャンとトルコの国境はいったい誰が守っているのか。ロシア兵がいるのかいないのか。アルメニアとトルコの国境には誰が立っているのか。その国境を通るときに意図的にビザを見せずに無理に通ろうとすると、もめて最終的に司令官が出てきます。その人に「あなたはロシア人か？」と聞いて、そうだとすることになれば、その地域は本質的に独立していない

ということになります。今後これらの国々がどういう方向に行くのが少しづつ見え始めてきました。1年以内にだいたいはっきりするのではないかと思います。

ただ問題なのは、飛行機で1時間かかるところは、車や汽車だと2日～3日かかることです。それから他の町の情報がない。交通機関の情報でさえないんです。Aという町にいて、BからCに行くために汽車があるのかバスがあるのかわからない。まだ情報のインフラが少ないので、行ってみなければ何もわからないんです。

このように入国の際に問題を起こし、尋問されるということを知りかえしてきたおかげで、その国のいろいろなことが妙な角度から見えてきたと思います。

器と中身のずれ

まず第1の点ですが、いま器と中身が相当ずれてしまった地域が出てきているということです。器というのは領土、中身は人や民族です。やはり100年や200年に一度くらいは、この器と中身の関係がどうしてもずれてきて調整が必要になってきますが、それがいま一挙に来ていると感じます。

1940年にヒットラーがフランスを陥落させた後、ドイツと日本とソ連の間で同盟関係を作って世界を分けようではないかという計画を立てたことがあります。ヒットラーがスターリンに、ドイツと日本の同盟にソ連も入ってくれと頼んだわけですが、そのときにスターリンが条件として出したものが以下の5つです。

25/11/40 ソ連→ドイツ

1. フィンランドからのドイツ軍撤退
2. ブルガリアとの協力条約（黒海におけるソ連の安全保障確保）
3. ボスポラス・ダーダネルス海峡をソ連軍基地のために租借
4. バトウーミ・バクー南部・ペルシャ湾ソ連の勢力圏へ
5. 北サハリン石油・石炭への日本の利権解消

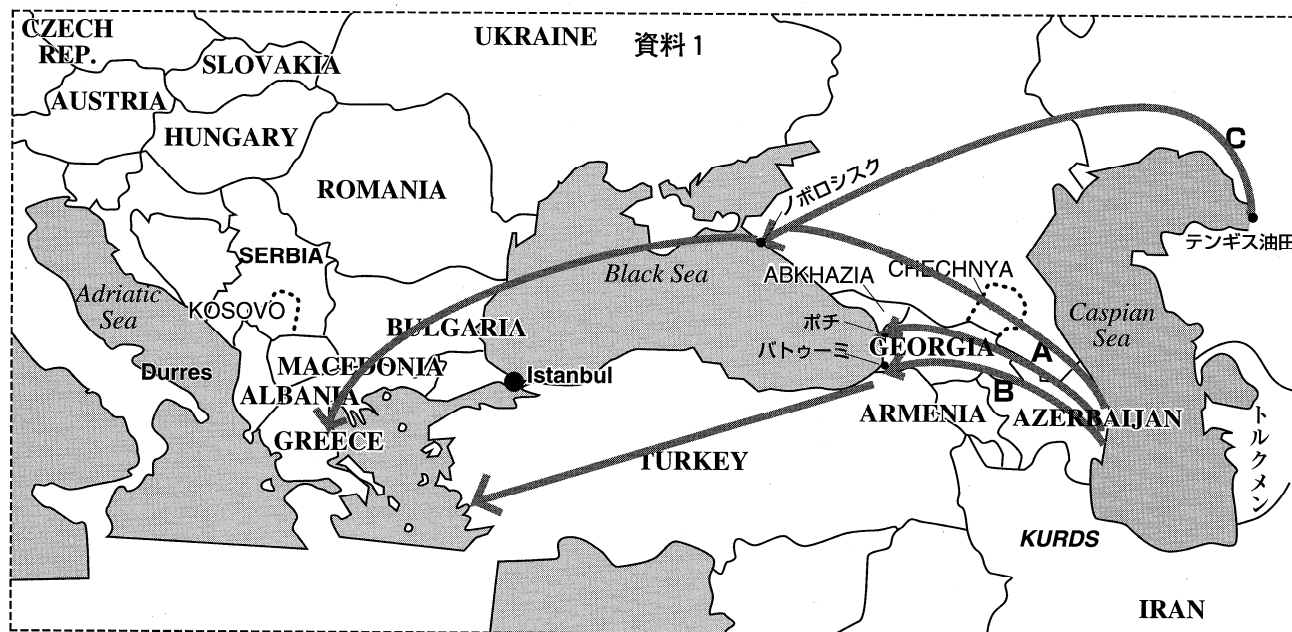
「フィンランドからのドイツ軍撤退」というのは、「フィンランドにドイツ軍が入っているようではレニングラード付近の安全保障は保たれない。バルトはソ連の勢力範囲であるから出てほしい」ということでした。フィンランドとノルウェーを置き換えると、いまの状況とかなり似ていると思います。ロシアと唯一国境を接するNATO国のノルウェーが、ムルマンスクに対して具体的な行動ができるような動きになっていますが、それに対してロシアは非常に警戒感をもっています。この北の部分を守れていないという状況は、40年に起こった中身と器が違ってきた状況に似ています。

次に「ブルガリアとの協力条約」です。ロシアは黒海を自分の内海にしたいわけですから、そこで一番やりやすいのはブルガリアをからめ取ることです。ブルガリアをコントロールできれば、後はトルコ抑えておけば黒海は排他的にロシアのものになります。第二次大戦中からこの目的をソ連はずっと追ってきました。冷戦で敗れたロシアは東欧を一度手放しましたが、いまは昔同様に動いています。ここ数カ月は少し国内で雑音がありますが、やはりロシアはブルガリアとの関係を強くして、ブルガリアがNATOに入らないように圧力をかけ、できれば自分たちの軍事協力の網の中

にブルガリアを再構築したいという特別な思いをもっています。後述しますが、ここでカスピ海周辺から産出されてくる石油を、ノボロシスクからブルガリアまでタンカーで運んで、ブルガリアからギリシャへ持っていき、ギリシャから世界に出すというルートの中の橋頭堡にブルガリアはなっています。そういう意味で、45年前に非常に重要だったのと同じように、いまもこの問題が出てきています。

3つめは「ボスポラス・ダーダネルス海峡をソ連軍の基地のため租借させる」ということですが、これもまさにいま問題になっているところです。なぜカスピ海付近の石油の輸送問題が出てくるかというと、トルコが「ここを50万トン級のタンカーが1日に何便も行きかう時代ではない。衝突事故が起きる可能性があり、エコロジ的に取り返しのつかないことになってしまう。1000万のイスタンブール人口はどうなるのか」と言って、タンカーを通さない決定をしました。それがひいては非常に大きな影響を与え、パイプラインをブルガリアを通じて出すとか、上から出すとか、横から出す、あるいは南アジアに出すなどという問題が出ており、ひいてはチェチェン問題を引き起こすまでの大事件になっているわけです。

4つめは「バトゥーミ、バクー南部、ベルシャ



湾」です。ここにバトゥーミという港があります(資料1)。カスピ海の周辺で採れた石油を持ってきて、バトゥーミやポチからトルコ側に出すという初期段階のアイデアが実現に向けて動いていますが、その重要な港です。それからバクー南部からペルシャ湾までを抑えれば、ソ連は南下のための決定的縦軸を手に入れます。これを手に入れたという要求をソ連は1940年に出していますが、いまのロシアもコーカサス政策として、何とかこれをイランとのつながりで間接的に取りたいとしています。イランとロシアの非常に緊密な関係がありますが、それもこれに通じる場所があります。

最後は「北サハリン」です。サハリンの南部は1940年当時日本に取られているわけですが、北サハリンのエネルギー資源を完全に手に入れたという問題があります。これは石油・天然ガス生産問題としていま動いています。このように1940年というのはドイツの電撃的勝利で、従来の器と中身の関係が一番ずれかかった時期ですが、現在の状況とこれだけ一致点があります。そういう時期にいま入っているわけです。

石油問題

そういった器と中身の問題、器とは領土で、さらにはその国の影響力とも言えます。また中身は人であり経済ですが、人口問題とも言えるかもしれません。さらにそれにベクトルを加えた勢いが入り、そういった勢いのある中身と国家とのずれが出ている時期にさしかかっており、そこに石油の問題が加わっているという状況です。これは1つの有力の説でしかありませんが、2000年頃には石油の生産がピークになるだろうということです。その頃にはOPECの石油生産のシェアが、再び日本にとって警戒すべき程度まで上昇すると言われています。その頃には1バレルが30ドルぐらいになるとも言われています。

石油がだんだん少なくなり、石油の時代から次の時代に移ると多くが認識したときに、非常に大きなゲームが展開されると思います。石油のリザーブをどれくらい持っているかによって、そのゲームのルールをどうするかが違ってきます。たとえばそれを玉入力で説明しますと、白にはたくさん玉が入り、赤にはあまり入らなかったとします。玉入れのおもしろいところは、玉を数える人のパフォーマンスです。そろそろ玉がなくなる頃になると、赤はまだたくさんあるかのように派手に演技をするわけですね。逆に白はもうないかのように振る舞い、はらはらさせて最後に逆転して見せる。それがおもしろいところですが、そういった劇的な瞬間が近づく相当前から赤が玉を演技せずに投げ、観客を白けさせる。そして「白の勝ちです」というアナウンスがなされる前に、「玉入れはおもしろくないから棒倒しをしよう」と言って、観客の目をそちらに向けさせてしまったとしたら、それは赤の勝ちですね。これを石油に置き換えると、自分の手持ちの石油をすべて使い切ったところで、次のエネルギーにぱっと移るということになります。白には石油のリザーブがたくさんあるにもかかわらず、市場が次のエネルギーに移ってしまったとしたら、水以下の価値になってしまうわけです。そういったゲームがおそらく5年後ぐらいに始まると思います。

一番石油があるのはペルシャ湾ですが、2番目がロシアの西シベリアで、3番目がこのカスピ海付近だと言われています。場合によってはスーパージャイアントがアムダリア流域(トルクメニスタンとウズベキスタンの間あたり)にあります。このあたりを巡って石油を持った人間は何年間くらいでリザーブを売り切って、そのときに一番儲かる価格はいくらなのかというゲームをし始めると思いますが、それにこの旧ソ連の問題が重なり始めています。ロシアがもうコーカサスはいらない、中央アジアもいらないという思いで1991年に

ソ連を解体してここまで来たわけですが、どうもこのゲームに巻き込まれそうな状況です。なぜ私がこの地域を歩き回っているのかということの1つの答えがそれです。

旧ソ連の復活

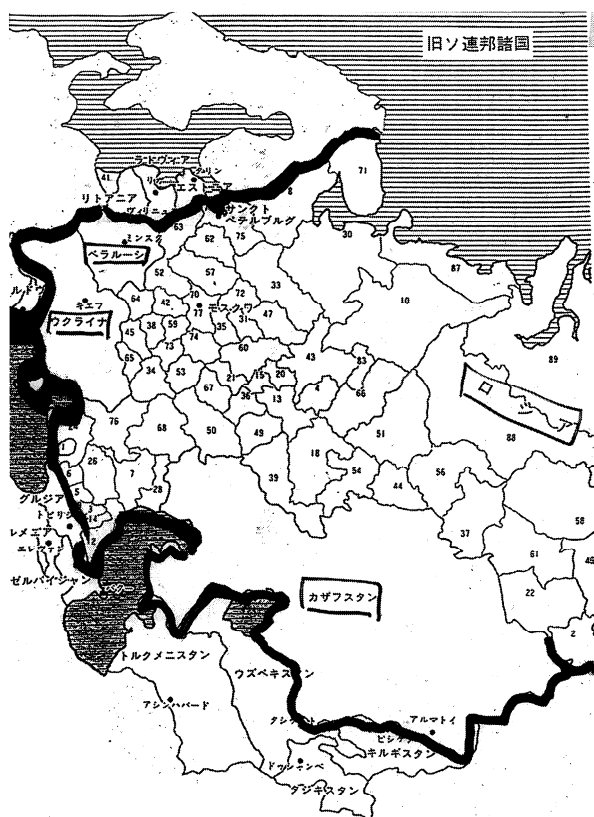
第1回目の報告会で、私はCISは永続しないと申しました。ロシアに忠実なグループ、ロシア以外のパトロンを見つけてロシアとその間を揺れ動くグループ、そしてはっきりと独立をしてモスクワと決別するグループとに分かれるだろうと当初から予想していましたが、最近はっきりとその傾向が出てきました。バルト3国は独立路線で進みました。ベラルーシは「主権」は捨てていませんが、もう「独立」のベラルーシではないと自ら宣言するに至りました。ロシアとの結びつきが連邦になるのか、吸収かは今後1年間に決められそうです。カザフスタンもベラルーシと同じようになるとは思えませんが、関税同盟に入りました。キ

ルギスタンもそれに続いて入り、少なくとも4ヶ国間で社会経済的統合が進んでいます。大きなロシアというか、小さなソ連が復活したと言っていると思います。

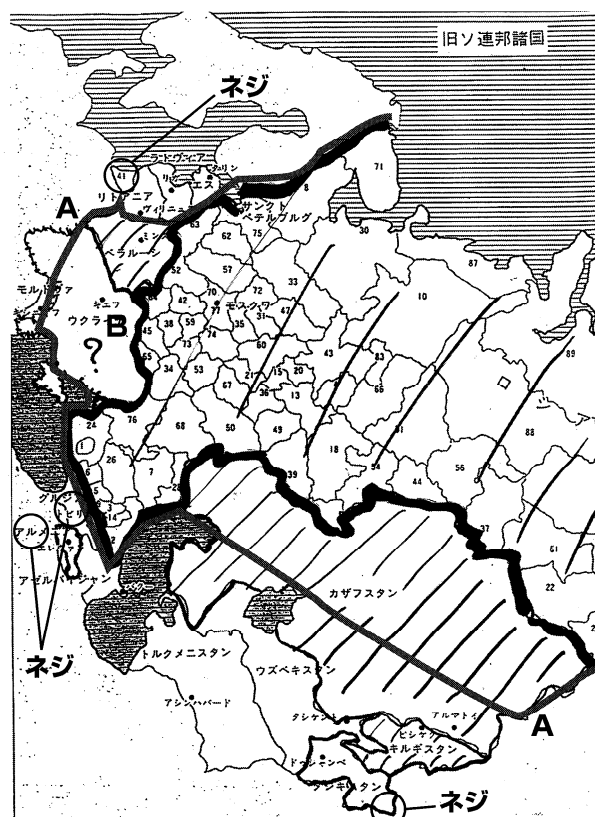
問題はウクライナをどうするかということです。最も合理的な新しいロシアの組み方は、ベラルーシ、ウクライナ、ロシア、カザフスタンで組んでいって、場合によってはここにキルギスタンも加えて組むという大きなものです(資料2)。あるいは資料3のA線に沿って、ウクライナでどうしても東側と一緒に生活することを望まない西側部分を除いて、カザフスタンもカスピ海の石油は取るとして、Aの線でカザフスタンを緩衝地帯にして取ってしまう。そしてここに小さなカザフスタンが生まれる。その場合はやはりキルギスタンは含まない形になりますから、エスニックにロシア的な線が入っていくという形があると思います。

もう1つは、ウクライナが入るか入らないかが最大の問題ですが入らないとして、このようにキ

資料2



資料3



ルギスタンまで経済的な網、ゆくゆくは安全保障の網をかけて、タジキスタンとアルメニアを前進基地にして、なんとかグルジアに軍事基地をいくつか置くという形で3つのネジを閉じる。それからカリニングラードでもネジを閉じる。ここもロシア領ですから。この4カ所でロシアの安全保障のための砦を作って、後の部分は内に含んでいくという形にする（資料3-B）。考えられるのはこの3つくらいだと思います。大統領選挙がどうなるかで形に差が出てくると思いますが、この3つのどれかで動くと思います。

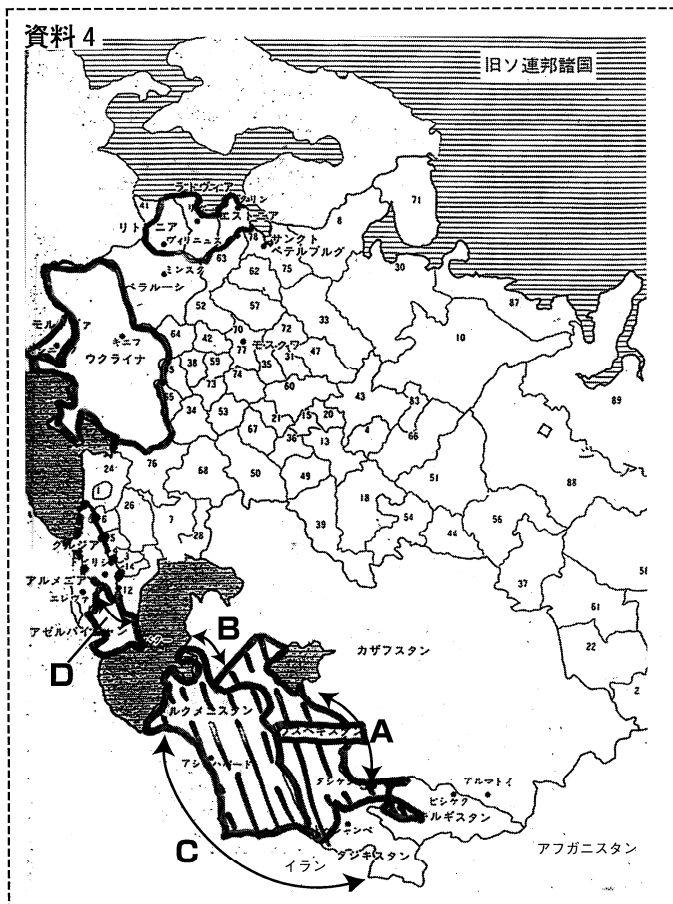
国境警備の穴

現状で問題なのは、いま明らかに穴があるということです。私のようにロシアのビザしか持たない人間がずーっと入れてしまう。どこから入れてしまうのか。ロシアの目から見えてははっきりと穴があいているのはウズベキスタンです。テルメスとアフガニスタンとの間に、旧ソ連との国境（外国

境と言っていますが）、外国境の穴が150キロに渡って空いています（資料4-A）。ここにロシア兵が国境警備のために入っていないことが問題です。独立路線のウズベキスタンが自由にできるわけです。ここから数百キロ東のタジキスタンからゲリラが入ってくるのは可能です。ここから入ってしまえば、後はずっとどこでも入れるわけです。パスポートさえあれば、どこまででも行けるということになります。

トルクメニスタンはロシアを後見役として、主に技術的サポートのために駐留させています。イランやアフガニスタンとの国境をいま誰が守っているのか、私にはわかりません。ただもう2～3年もすれば、ここはトルクメニスタン自身を守る形になってくると思います。そうなるここに2つめの穴が空いてしまうことになります（資料4-B）。これらの穴をふさぐためには、ここ（資料4-C）に国境を作らなければならないという大変なことになるわけです。

もう1つ大きな穴があいているのはアゼルバイジャンです（資料4-D）。アゼルバイジャンは断固としてロシア兵の国境警備を許しておりません。つまりここはモスクワのコントロールがきかないということになります。ここから入ってくると、チェチェンのゲリラに武器を供給したり、トレーニングすることができることになります。そういう危険性があるとロシアは主張しています。私はどこまでやっているか調べていませんが、たしかに可能ではあります。したがってロシアはいま何をしているかというと、この線を閉じております。私は先日ここに行きました。ビザなしで入り、パクーでアゼルバイジャンのビザを取って鉄道でロシアとの国境まで行きましたが、ロシア側がブロックしていて列車はまったく動いていない状態でした。そこの国境警備の司令官にいろいろ尋問を受け、その後友人関係になり、彼が車でロシアに入ったらどうかと言って国境まで送って



くれました。

ここは昨年10月のロシアとアゼルバイジャンの協定で、国際国境であるとはっきりと決められております。つまりロシア人とアゼルバイジャン人だけの国境ではなく誰でも通れるという国境です。私はその文書を持ってそこに行ったわけですが、アゼルバイジャン側では出してくれたにもかかわらず、ロシア側は断固として入れてくれませんでした。そのときに横を見ますと、アゼルバイジャンからロシアに向かう乗用車が8台ほど止まっていた。見るとリングが山のように積まれている。でも動く気配はありませんでした。逆にロシアからアゼルバイジャンにはすいすいトラックが入っていく。つまりアゼルバイジャンは受け入れているにもかかわらず、ロシアはアゼルバイジャンからの流れをストップしているのです。もちろん賄賂を使えば入れるわけですが、払ってしまうとリングを売っても商売にならないぐらいの額に設定してあるようです。本当に困った場合には入れるわけですが、商売をしようと思うと入れないわけです。ここがこのようにブロックされています。あとはグルジアから来る鉄道とイラン、ドバイからのトラック輸送だけでアゼルバイジャンは生きています。なぜロシアはそうしているのかというと、アゼルバイジャンの穴を圧力で埋めようとしているからです。

もう1つは、カスピ海にある石油をアゼルバイジャンを通してグルジアに持ってきて、グルジアからトルコに流してしまうアイディアが進んでいるということです。ロシアは、カスピ海の石油がロシアのパイプラインを通るならばOKだがそれ以外は許さないという方針を出していました。このように、パイプラインを西に回そうとしているという問題と、ロシア兵をここに入れてくれないという2つの理由によって、ロシアがアゼルバイジャン国境でブロックをにかけているわけです。

私はアゼルバイジャンの人間が封鎖を受けてどのように考えているのか、そして将来どうなっていくのかに興味がありました。バクーにあるトゥルメンバシー（クラスノボツク）行きフェリー乗り場に行ったときに、イランとの国境近くでレモンを作っている農村からの20人ぐらいの一群と話をしました。彼らは黒澤明の世界によく出てくるように、村全体の生活をかけて行商隊を組んだのです。しかしこの辺ではレモンは売れない、具体的にはロシアの500キロくらい北へ行くと作物が違いますから、アストラハンまで行けば売れる、ということで出てきた。ところが最短ルートで北に向かうと1人400ドルかかってしまう。私がブロックされた所で、ロシア兵に賄賂を取られるからです。

しかし、ここからフェリーでトルクメニスタンまで行き、バスを乗り継いでカザフスタンのアクタウに行き、アクタウからアティラウに行き、アティラウから車でアストラハンまで行くと100ドルで行けそうだと計算したのです。それなら一番いいレモンをみんなでかついでいけば、何とか儲けが出るから行こう、そういう集団でした。私は彼らに「大変だね」と声をかけました。彼らは「ロシアがブロックをかけるから悪い」と言う。でも彼らは「苦しいけれども独立国としてロシア兵を入れない。そして西にパイプラインを入れるんだ」と言っていました。

その後彼らと別れてあちこち寄りながら、2日遅れでフェリーに乗り、16時間かかってトルクメニスタンに着きました。それからうまく週1便のバスに乗り、16時間かけてアクタウに着きました。アクタウからはどうしても時間がなくて1時間飛行機に乗りました。そしてロシアとカザフスタンの国境から300キロほど東のアティラウに着きました。そこから私はバスか車でアストラハンに入りたかったわけです。本当はバスで国境を渡るのいいのですが極度に疲れており、翌日の朝7

時に汽車に出るというので、350キロくらいの距離で16時間かかるんですが、まあそれでもいいや、それに明日乗ろうと思っていました。偶然にもまたそこで彼らに会いました。彼らは「あれからもう1週間たった。もう一息でアストラハンまで行ける。そうすれば村を救うことができる」と意気盛んでした。彼らは「夜の11時にバスが出るようかけあったのでお前も一緒に行こう」と言ってくれたのですが、私はあまりにも疲れており、それを断って150円の駅のベッドで朝まで寝ることにしたわけです。しかし朝になるとまだそこに彼らがいる。荷物が多すぎるので値段の交渉が折り合わなかったのです。

この調子ではいつバスでアストラハンに行けるかわかりません。汽車では大きな荷物は運べません。汽車に乗り込む私に、彼らは「ソ連は間違いなく復活するぞ」と言うんです。私は「じゃあ、アゼルバイジャンの独立を守ろうとして頑張っているお前たちの英雄のアリーエフはかわいそうじゃないか」と言ったんです。すると彼はにやっと笑って「モスクワの政治局員にもう一度なればいいんだ」と言いました。意気揚々と村を出てきたのに、どんどん歩いてくる間に、あまりの困難さに気持ちが変わってしまったのです。ロシアが悪いのではなくて、ソ連をつぶしてしまったことがどうしようもなく不合理だったのだと彼らは思っているのです。彼らは結局何とかレモンを売って帰ったのだらうと思いますが、ある意味でロシアのブロックケードは効いているのだと感じますし、そういう人の心の動きも非常に重要だと思います。

グルジアの動き

その次はグルジアです。ロシアにとって、グルジアをどうするのかということが問題になってきます。グルジアがアゼルバイジャンからの石油を經由して西に流していくとすると、ロシアにとっ

ていいシナリオではありません。もちろんロシアも最近は多少合理的になりまして、旧ソ連にある石油を全部自分たちのルートを通して西側に売ることはできない。国際的なメジャーとの協力が必要であるとは理解しているようですが、それもまた強硬路線に戻るかもしれません。そういう意味で西側とは組むけれども、何とか自分たちに特別に有利な形で、旧ソ連に存在するガスや石油について処理したいと考えています。それは、もうすぐ始まる石油から次のものに主要エネルギーが代わる時期に、発言権が持てるかどうかの決定的なポイントになります。だから何としてもそれをコントロールしたいわけです。それにもかかわらず、グルジアとアゼルバイジャンとトルコが協力して（ここにはっきりと陰でアメリカが付いているわけですが）、ロシアとは別のルートで流そうとしているわけです。したがってこのグルジアがどちらを向くかは、ロシアにとって大きな意味があるわけです。さらにグルジアから一部が黒海の北岸のウクライナに流れれば、ウクライナはかなりロシアの経済的コントロールを逃れて独立を保てる。そうなる则かなり小さなソ連の復活しかありえないことになります。

西側としてはどうしたらいいでしょうか。ウズベキスタンが、本当にモスクワから離れて独立したいと言ったら援助すべきなのか。トルクメニスタンはどうなのか。グルジアやアゼルバイジャン、ウクライナはどうなのか…。一番重要なのは、これらの国に独立できるだけの基盤や国民の意志があるかということですが、西側の支持も大変重要です。それをミックスしてどうなるのかというのが、ここ1年ぐらいの間に見えるだろうと思います。逆に言うと、ロシアが旧ソ連の大半を含む形で浮かび上がるか、それとも主に天然資源をコントロールする形で経済的に出てくるかわかりませんが、それが大きく組めるか小さく組むかが決まる時期がここ1～2年くらいだと思います。

だいたいこれらが大きな穴と言えます。ウクライナもいまのところ自分たちで守っています。モルドワも同様です。アゼルバイジャンとは、このままではロシア国境を外国境にする形で閉じることをロシアも覚悟していると思います。そしてベラルーシはもう含めたとなると、あとはこのタジキスタン、ウズベキスタン、そしてトルクメニスタンを半分として、2つ半の穴の問題になります。これだけが未処理の問題ですが、かなり重要な問題です。

CISの消滅

次にCISの話をしたいと思います。これからだんだんにCISという言葉は使われなくなると見ていいと思います。いままでCISというのは独立した15の国の集まりである、それはもう一度まとまっていくのか、ばらばらになっていくのかわからないけれども、15の国が集まったところの何かであるというものでした。しかしこれからは「CISが重要だ」と言ったとすると、「ロシアの影響力がこれ以上浸透すべきではない、主権だけでなく独立が重要だ」と言っていることになりすし、「CISはもう意味がない」と言えば、「ロシアの影響力がさらに浸透すべきで、元に戻るのもよいし、主権的なものが少し残っていればよい」と言っていることになります。CISがいいというのは、たとえばウズベキスタン、ウクライナ、アゼルバイジャンなどです。また関税同盟に入ったキルギスタンなども、経済的要因で参加を余儀なくされた経緯があるので、CISが重要と言っています。「CISの枠組みが重要だからそれらをこわさないでほしい」という発言は、各国がどの位置にあれ、ロシアの影響力をこれ以上大きくしたくないという時に、突如使うブレーキのようなものになったのです。そういう意味でそう言っているだけです。それはCIS自体がいいからではなくて、自分は主権も保持するし、独立も保持するというロシアと

の2国間関係における意志表示になってしまう。政治的なスローガンや方向性を示すものではあっても、ある種の空間を示す言葉ではなくなっていくと思います。その意味でCISのこれまでの概念は消えてしまったと言っていると思います。

ロシア極東問題

もう1つの問題は極東とモンゴルの問題です。これもやはり100年に1度ぐらいの大きな変化が来ていると思います。100年ほど前に朝鮮半島をいったいどこがにぎるかという問題で日清戦争が起こったわけですし、次にロシアなのか日本なのかということで日露戦争が起こったわけです。その後日本が朝鮮半島を独占し、第二次世界大戦になり、分断が起こって現在に至っています。おそらく1～2年以内に、朝鮮半島に朝鮮民族の統一国家ができると思います。新しい時代がやってくることになります。そこまでは言えると思いますが、もう少し話をつきつめると統一した朝鮮民族は中国と組んでいくのか。いったい「中華」というものをどうとらえるのか。脅威なのか、そうではないのか。脅威ととらえるならばどこと組むのか。ロシアなのか日本なのか。日本とロシアなのか。そこにアメリカがどうからむのかということです。そういう問題にいきつくでしょうし、そこまで考えた方がいいと思います。

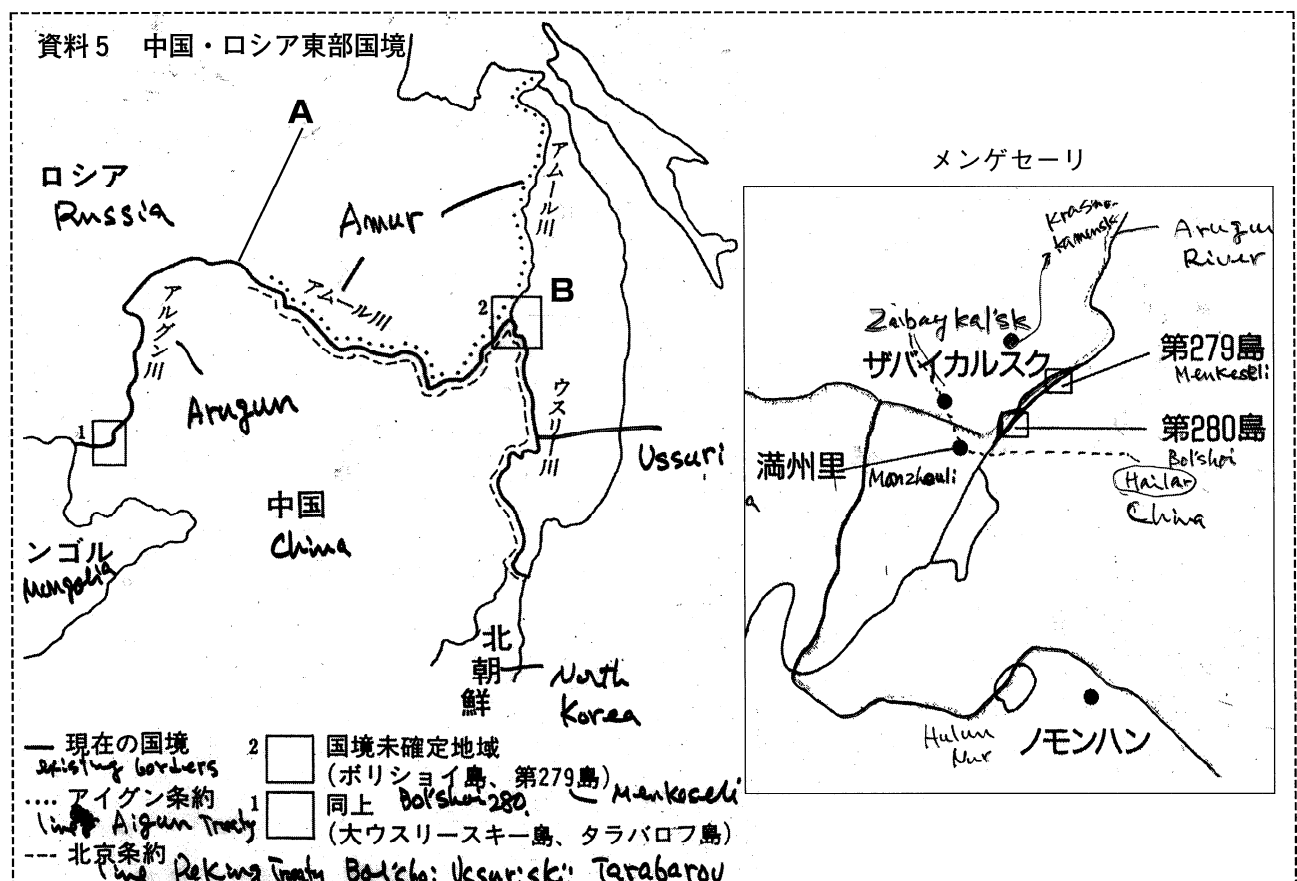
もう少し言えば、朝鮮半島と中国とロシアは豆満江のあたりで重なっておりますが、この辺の地域、それと外蒙古、内蒙古、ウイグル、チベットまで含めて、中国の中、もしくは中国国境をまたいで存在する少数民族の問題というものが非常に重要だろうと思います。特にこの辺の土地にどれぐらいの少数民族が住んでいて、どういう状態にあって何を目標しているのか、どういう連係プレーをしようとしているのかということと、先ほど申しました統一の朝鮮が出てきたときに、中国とどう組むのか、日本とどう組むのか、そういう

問題と確実に重なると思います。それは先ほど旧ソ連の世界で説明しましたように民族のからみ、どういうふうに住んでいるかというのが決定的に重要な政治的な軸になるわけです。これは非常に現実的に起こってくる問題だろうと思います。

先ほどの歴史の話を少し続けますと、第一次大戦の最中にロシアがドイツと戦うために日本からの武器が必要になり、そこでいろいろなディールができあがりました。どういうディールかというと、朝鮮半島は日本のものであるということを認める。内蒙古については半分分けをしよう、満州についても半分分けをしようと。外モンゴルと新疆についてはモスクワのものであるというディールが成り立って、その後30年代に日本がここで膨張したわけです。それから第二次大戦になっていきました。第二次大戦後半に、米国の後押しもあって中国は内蒙古と満州を取り戻し、その後に新疆も取り返す形になりました。中国の犠牲の上でロシアと日本があつた辺を分け合ってきたわけで

す。中国が成立してからは、中国と根幹とする左右のこの部分、内蒙古と満州と新疆は復活するわけです。そういう形で続いてきたわけですが、ここで非常に大きな変化が表れつつあるわけです。

まず第1は極東です。このように中国、ロシア、北朝鮮の国境があります（資料5）。ここの力の相関関係が、明らかにロシアから中国側に移っています。120年ぶりか、150年ぶりでしょうか。この辺のロシアの人口が、ついこの間まで800万人だったのに、いまは760万人くらいでしょうか。人口がどんどん減っていますし、幹線であるシベリア鉄道が機能なくなっています。これが値上がりのためにほとんど動かなくなっていくということになると、ここの部分はさらに弱くなり、中国の力が強くなる。この辺だけで中国の人口は1億あるという状況ですから、人口圧力ははっきりしているわけです。



モンゴル

モンゴルが要注意です。この国はロシアの影響下にあったわけですが、1990年以来本当の意味で独立した状態になってきています。それを象徴的に示すのは、一番の高額紙幣にチンギスハンが登場していることです。モンゴルはこれに象徴されるように、中国とロシアの間に真の独立の方向に進んできているわけですが、その通りにいくのかどうかということが問題になってきます。シナリオとしては、いま目指しているように中国とロシアの間の緩衝地帯として生き続けるのか、それとも中国の影響下に入ってしまうのか。それとも中国の脅威を受けてもう一度ロシアの影響下に戻ってしまうのか。おそらくこのどれかしかなと思います。1992年～94年に中国人がわっと極東ロシアに入ったわけですが、ロシアが締め出しにかかったので、いまはモンゴルの方に入り始めているようですから、かなりこれが強くなると思います。モンゴルの人口はたった230万人しかありません。他にモンゴル系がロシアの中に100万人いて、中国（内モンゴル）には360万おります。このように、国としてはロシアと中国にはさまれた、かつ人口的にはハンガリーのように自民族によってサンドイッチされている地域です。モンゴルの今後のコースは、極東の地図の中で大きな問題になっ

てくると思います。日本としてはこれが緩衝地帯として中立を保てるように、いくら大きな援助をしてもそれだけの価値はあると思います。

さらに領土問題で2つほど大きなものがありますので、ご説明します（資料5）。これがモンゴルとロシアと中国が国境を重ね合うバイカル湖の右下を流れるアルゲン川です（資料5-A）。ここにバリショイ・オストラフ（大島）というのがありますが、現在のところここはロシアが保ちそうです。しかし1つおもしろい地域がありまして、その東側に幅7キロから4キロ、長さ70キロのメンゲセーリという地域があります（資料5-B）。中口国境確定の際、つまり100年以上も前のことです。川が7キロから4キロ南を流れていました。つまりロシアの力が強い時に国境がその線で引かれました。その後川の流れが北側に、つまりロシア寄りになりました。ゴルバチョフが出てきてから川を国境線にすると決め、1991年に協定が結ばれました。そこで川と国境線の間の隙間をどうするかということになります。川が国境線ならばこの隙間は中国の領土ということになります。協定でもこれに合意しました。どうもここが最近中国側に譲り渡されたようです。しかしロシア側の要求で、ここを共同利用しようという話が出ています。これが本当に共同利用できるならば、

資料6 モンゴル 3つのシナリオ

1. 中・ロの間の緩衝地帯
2. 中国の影響下
3. ロシアの影響下

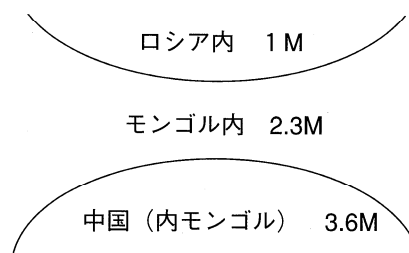


肖像がジンギスカンに変わったモンゴルの高額紙幣の一部（100ツグrik）

中国にとり、新生モンゴルはプラスとマイナスをもたらす。

1993.4 極東ロシア

現在 モンゴル



日本が抱えている北方領土問題にもかなりのインパクトがあると思います。すなわち日本側に主権を移して、その後共同利用するというような解決法をとれる可能性も出てくるわけです。これをちょっと調べてみたいと思っています。

先ほど器と中身の話をしましたが、非常に興味深いことに旧社会主義陣営で、これ以外の所でもかなり多くの領土問題が動いています。国境線をどこに引くのかという問題が10いくつあると思います。日本のように島ではなく、ここでは大半が実際に人が生きて接している面の問題ですから、何とか妥協をしなければならないわけです。社会主義陣営は全体的につぶれ、ソ連もつぶれたことのおりを受けていろいろな問題が出てきて、いろいろな国の間で現実的に妥協に向けて動き始めています。これが1つの歴史的にユニークな領土を動かしている時期だと考えると、日本にとっていま北方四島をどう動かしたらいいのかという1つのヒントが出てくると思います。もし国際的に、

歴史的に一時期のみこの地域は動かしていいことになればそれに乗った方がいいのか、それとも日本とロシアの領土問題は島の問題だし、かなり特殊である。以前からモスクワはここを日本にいいように解決してしまうと、パンドラの箱が開いたように色々なところでどんどん出てくる可能性があるのでは、日本側には譲歩できないというように言ってきています。そこで、むしろ他の領土問題が解決されるまで待つて、どのような経緯で解決されるのかということを見た上で、さあもうパンドラは開きませんと後に交渉した方がいいのか、その辺の判断をすべき時期に来ているんじゃないでしょうか。ドイツや中国の例を見ても、1991年頃がその例の時期だったことは確かです。

コーカサス

最後のトピックですが、コーカサスについてです。コーカサス地方はカスピ海と黒海の間で、カスピ海の西側にあり、その東側は中央アジアです。



問題は中央アジアとコーカサスが南側（ロシアと反対側）でつながることができず、これまでロシア側でつながってきたということで、これが長い間ロシアがこれら両地方を支配してきたポイントになっています。資料7のように、石油を流すルート アイディアがいくつかあり、それぞれ動いております。

アゼルバイジャンにどれぐらい石油があるかという、北海油田と同じぐらいと言っていいと思います（資料8）。カスピ海全体で80億トンから400億トンくらいあるだろうと言われています。サウジアラビアで520億トンくらいあります。これは推定で、カスピ海の場合幅が大きいのですが、場合によっては相当あるということが言えます。一説によるとここが開発されることによって価格コントロールがうまくいけなくなり、OPEC側が開発のじゃまをする可能性があるのではないかとされるほど大きな問題になりそうです。ここでの1つのワイルドカードというか、わからない部分がアムダリア川で、ここに相当の石油があると言われています。

アゼルバイジャンの初期産出石油をどう流すのかによって道筋ができてしまい、アムダリア流域の石油もテングスの石油も同様に流れていく可能性があります。そうするとロシアにとって不利な状況になります。したがってロシアとしてはできるだけ多くを自国経由ルートで左上がりに流したいということがあります。ここにそれほど大きなものがあるならば、中央アジアの石油や天然ガスは全方向的に流れることになります。しかし各方

向に、クルド、ウイグル、チェチェンその他のパイプラインを壊しそうな民族が存在しています。

ロシアの報復

1年半ほど前からコーカサスで必ず大きなことが起こると申し上げてきましたが、一番ドラマティックな形で起こったのが、昨年8月31日のシュワルナゼ暗殺未遂です。シュワルナゼはロシア側からやめろと圧力をかけられていたにもかかわらず、アゼルバイジャンからグルジアを通してトルコに流すというパイプライン案を進めたがゆえに、爆弾テロであやうく殺されそうになったわけです。犯人については憶測ですが、グルジア統一共産党党首のパンテレimon・ゲオルガゼの息子のイゴルという男がおりまして、私と同じ年のKGBのはえぬきですが、彼がやったと言われています。彼はロシアの要求でグルジアKGBの議長でした。彼はこれまでもシュワルナゼへの警告として、彼の右腕と言われた人間などを殺したようです。断固西側に近づくべきであると主張していた国民民主党のチャントゥーリアという人物も暗殺されています。彼の奥さんでシュワルナゼに次ぐ人気があるといわれるイリーナも、グルジアはいま西の方向に進むべきだという主張をしていますが、彼女も重傷を負いました。

シュワルナゼはこういう形で殺されそうになったわけですが、いろいろ調べていくうちにイゴルが犯人で、つまりロシアがやったらしいということがわかってきました。ちなみにロシアがイゴルを動かしていたとすれば、その時のイゴルのボスはプリマコフということになります。トビリシの郊外5キロくらいのところにロシアのザコーカサス・軍管区がありまして、そこにある大きな建物がこの辺の軍管区の元締めです。その中にグルジアの国防省があるという何とも結びついた関係になっています。そこにレウトという司令官がおりまして、そのレウトの副官だった男がナディワイ

資料8 アゼルバイジャン（およびカスピ海）の石油埋蔵量に関して

アゼルバイジャン油田の埋蔵量は北海油田と同規模

カスピ海	サウジアラビア
推定埋蔵量	推定埋蔵量
80-400億トン	520億トン

ゼという人間ですが、ナディワイゼはもちろんロシアの要請によってグルジアの国防相に任命されました。給料はロシアから払われているとの話ですが、彼は完全にロシアの意を受けた行動をしています。そしてもう1人ロシアを意を受けたKGBのイゴル・ゲオルガゼがいて、これが爆弾をしかけたりということをしたわけです。彼は当然のようにこのロシアの軍管区の建物に逃げ込み、レウト専用の飛行機でモスクワに逃げてしまい、いまだにつかまっております。

シュワルナゼはその後グルジアのKGB本部に行き、「なぜそんなにスパイがほしいのか。ナディワイゼという最高のスパイがいるではないか」と言いました。最高の皮肉なんですけど…。「ロシアは国防省を取っているんだから、KGBまで取る必要はないだろう」というふうに訴えまして、イゴルの追求を始めたということがあります。

また、ザトゥーリンというコーカサス生まれの

大ロシア主義者でロシアの下院議員がいますが、彼がラジオのインタビューで「イゴル・ゲオルガゼは下手人かどうか知らないが返さない。なぜならグルジアは、ロシアが再三にわたって西に向かうパイプラインを作るなど警告したにもかかわらず、だましてやったではないか。そして実際に決めたのはアメリカである。アメリカのためにグルジアはやったのだ。だから返さない」とはっきり言ったわけです。それに対してシュワルナゼは、「ロシアが返してくれないので、自分の心はさみしい」という弱い表明を出し、まだこの問題は収まっています。それぐらいドラマティックな動きが起こっています。パイプラインの問題は今年の秋ぐらいまでにだいたい決まってくると思いますが、決まりさえすればすぐにパイプラインはできると思いますので、何度も申ししていますが、これも焦点としては1～2年ぐらいで決着がつくのではないかと思います。

第二部 質疑応答

秋野

言い残したことはたくさんあるのですが、まずはここでおしまいにして、質問をお受けしたいと思います。

三菱自動車・大鷹氏

先ほど朝鮮半島が1～2年の間に統一されるとおっしゃいましたが、どんなシナリオを考えていらっしゃるのでしょうか。

秋野

この問題の専門家ではないのですが、多分冒險的なことをしてつぶれてしまうか、内部から何か起こるか、そういったシナリオになるかと思います。今日強調したかったのはどのようにつぶれるのか、つぶれる際に中国、ロシア、日本、アメリカがどのように関与するかが将来にわたって大きな影響をもつということです。その意味で日本としても相当の準備をしておいた方がいいと思います。どのようにつぶれるかはルーマニア型なり、内部の転覆でスムーズにひっくりかえるなり、大きく分けると2つになると思いますが、どちらになるかはお答えできません。

ジャーナリスト・菅原氏

アムール川のロシアと中国の国境解決問題について非常に興味があります。これからの紛争解決の仕方が前向きなものになればと期待しているんですが、それをもう少し詳しくお聞きしたいのと、本日ロシア大使館のサープリン氏がいらしているので、その情報がおわかりならお教えいただきたいのですが。

秋野

4月26～27日頃にエリツィン大統領が北京に行って、この辺の安全保障に関する協定、信頼醸成

措置を柱としてですが、重要な取り決めについての調印をすることになっています。これは私の推測なんです、いま中口の国境確定がはっきりできるのならば、やはりそれを前に出したというように思います。国境確定はすっきりとできたと。それに基づいて軍事的な信頼醸成措置に関する協定調印をする、というような形にしたのだと思います。中口間の信頼醸成の動きは現実には動いておりますし、国境地帯をロシア側から中国側に向かって歩きますと、ロシア側の兵舎の空が目立ちます。以前はすごい数の軍隊をはりつけておいたんですが、いまは荒廃しております。いまのロシアにとって、ここでもう一度緊張が起こったときに元に戻すということは不可能だと思います。中国との間で紛争が起こったときはロシアは何もできないというかなり不利な状況になると思います。その意味で中国とロシアの力関係は100何年ぶりに逆転しました。その中で領土がロシア側から中国側に渡されるということはどういうインパクトをもつことになるのか。力関係が中国の側にさらに有利になるのかどうかは1つの問題です。

もう1つ大きな問題があります。ハサンです(資料9)。1938年に日本とソ連の間でハサン湖事件が起こった場所ですが、ロシアが日本を撃退したときに副産物といえるものを得ました。それはより守りやすくするために、国境線をそれより50年ほど前に決めた国境線よりも少し前に出したことです。その分を戻せという交渉がいま行われています。それが豆満江をめぐる国境確定協定です。このように膨らんでおりまして、川とロシア領との間の狭い部分を少し出してほしいというのが中国の要求です。

実はこの問題はかなり複雑化しています。以前ここはコサックの領土だったため、ロシアは昨年微妙なところをコサックに譲り渡したんです。コサックはいまエリツィン大統領に対して、「ここ

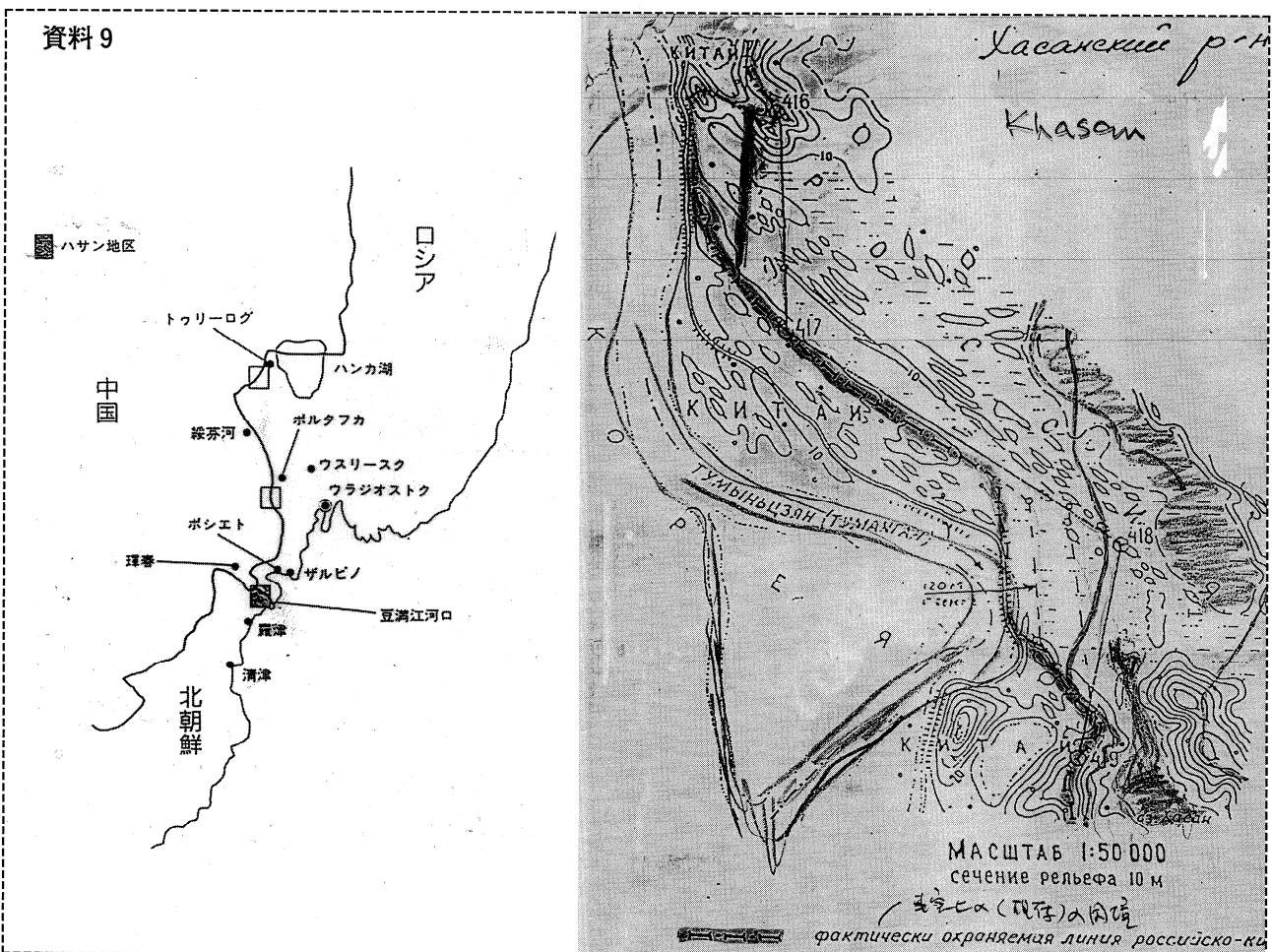
を中国に譲り渡すのならハンガーストライキをする」とか、「死んでもいいからここを守る」と言っていますので、もつれると思います。これは単に歴史的な問題を超えています。ここに中国が港を作りたいんですね。そのときにこの川と道路がこれしかないので、これを少し右側に広げておきたい。というのは、ここから17キロのところに日本海があります。あと17キロで中国は日本海国になるわけです。ハサン湖の水がなければ港をやっ
ていけないということもあり、大きな問題が起こっているわけです。ここを中国側に要求通りにふくらませてやると中国はかなり大きなことができるわけです。

もっと言えば、ここにザルビノ、ポシエトというロシアの港がありますが（資料9）、そこからつないで来るか、それとも豆満江に港ができて河口から直接入っていくのかということです。先ほど申しましたように、シベリア鉄道がもうこれか

らかつてほど動かないので、ハサンから30キロのところにあるザルビノ、ポシエトを使って日本がそこに投資をしてそこから入ってくると、ロシアは極東の入口としてかなり有利なことになります。しかし、もし中国が豆満江に港を作ってしまうと、極東は完全に浮いてしまうという問題があります。以前から日本が北に行くのか、南に行くのか、つまりロシアなのか中国なのかという問題があったわけですが、ここは30キロ先に金を落としてやるか、30キロ西に落としてやるかで、以前は何百キロも離れていた南か北かという問題が、30キロにまで近づいてきたということになるわけです。これは日本がはっきりと判断をして、どちらかにすべき問題です。

そしていま問題の北朝鮮があります。これがどういう形でつぶれるのか。つぶれるときにロシア、中国、日本がどうするのかという問題がそこにからんでくるわけです。そういうわけで、豆満江は

資料9



いくつかある領土問題の中でも一番重要な問題であり、中国側が最も強く要求しているのがここです。

サープリン氏

私は直接この問題に携わっていないのでよくわかりませんが、地元にはかなり抵抗があって、交渉していたロシア国境確定委の議長をしていた軍人も最近はやめると言っていましたし、問題もあるようです。

法の問題、あるいは歴史の問題、また現在の利害のぶつかりあいから生まれるいろいろな問題がありますが、基本的には両国の関係の将来性のウエイトが大きいので、その観点で動くかもしれません。ただどのようにうまくやるかですね。地元にもあまり不満がないように、ロシアの国益も損なわないようにどう判断するか、ということだと思います。

もう1つはこれからエリツィン大統領が中国に行くことで、信頼醸成措置の問題がどうなるかです。これはロシアと中国だけではなく、一方はロシアとカザフスタン、キルギスタン、タジキスタンの中央アジア3国との共同で中国と協定を結ぶというユニークな信頼醸成措置の組み合わせになりそうです。つまりロシアだけでなく、国境線全体としての信頼醸成措置を中国を相手に確立するという実験、あるいは見本になるのではないかと思います。

秋野

この東側の国境線が4200キロぐらいありまして、そこから3000キロぐらいモンゴルがあり、そこからアルタイ地方が55キロほどあり、それからカザフスタン、キルギスタン、タジキスタンと3500キロぐらいあります。それ全体で信頼醸成措置を行おうというアイデアです。

ここではモンゴルが一番穴になるます。モンゴ

ルへ行くと非常にユーモラスな国境線が引いてあります。それは、トウクラーで草を刈った10メートルほどの幅の線なのです。どういうことかという、よほど幅跳びがすごいか、竹馬でも使わないかぎりそこに足跡が残るんです。それだけの意味しかないんですが…。

モンゴルは230万人しか人がいないわけですから。中国が数年前に、中央アジアに対しても、極東ロシアに対しても、ものすごい数の人間をある意味で送り込んだわけですが、モンゴルにも50万の人間を一度に送り込んだら、モンゴルは一夜で消えてしまうかもしれません。そういうあやうさがあります。ロシアの軍隊がここからいなくなったので、いまはわずか2万の自前の軍隊しかしかいません。軍事関係の人間に、「もう2万しかいませんね」と聞くと「知りません、そうかもしれませんが、それに関する議論はしません」、「どうしてか」と聞くと、「2万だとわかったらこれだけの国境をどうやって守るのかとみんなが考える。考えれば守れないことがわかり、パニックになる。だから2万という数字は言いません。」という状況です。内モンゴルも以前は圧倒的にモンゴルが多かったのですが、戦後数年のうちにひっくりかえってしまった。新疆も同じです。ウイグルが非常に強かったにもかかわらず、いま北の部分はひっくりかえってしまった。モンゴルでもそれが来た場合にバランスが崩れるということが1つの問題です。

先ほどパイプラインの話をしました。東に流す、南に流す、中東に流す、それから西に流す、上に流すという問題ですが、ここでもう1つ我々が考えなければならないのは少数民族の問題です。たとえばほとんどのパイプラインのところに、国家を持っていないがゆえに国家建設運動や自治運動をしようという少数民族がいるわけです。たとえば横に流す場合にはクルドの問題があるわけです。ロシアがグルジアからトルコに行くルート

阻止したいと思うと、クルドに金を落として破壊活動をさせる。そうするとこのパイプラインは、いつでも破壊されるということで、建設の阻止をすることが可能となります。

ロシアが何に直面しているかというチェチェンです。チェチェンの問題があって、パイプラインを破壊し続けるということになれば、ここはもう通らないですね。そこで中国に行こうとするとウイグルの問題があります。ウイグルにとって国家がもてるか、もてないかというのはいまが最後のチャンスですから、やはりそのためにいろいろなことをします。さらにアフガニスタンの問題もあります。モンゴルもイルクーツクからガスをもってくる場合には問題になってきます。このように、いままで冷戦の下で放置してきたマイナーと言われる問題が、これからパイプを引くときに必ず問題になってきます。これは早いうちに解決しなければなりません。

モンゴルについてももう少し申しますと、モンゴル人はロシアの中のブリアートその他、モンゴル本国、中国と分かれて住んでいます。まだ文化的な面ですが、前首相のジャンバスレンその他も大モンゴル運動をやろうとしています。それが政治的に動いた場合、非常に不安定になります。そうすると中国にとっては恐い、ロシアにとっても恐い分離主義的存在になります。これをどうしたらいいのかがポイントです。モンゴルのような緩衝地帯を、どうにか安定的なものとして固定してやる必要があります。これはいくらやってもやりすぎになることはないと思いますが、一番最初のステップとしてはハンガリーモデルを使えばいいと思います。

ハンガリーも同じようにスロバキアにハンガリー系がおり、ウクライナにおり、ルーマニアにもユーゴにもいるというように、国の真ん中に中核のハンガリー人がいてその周りをずっと300万とも言われるハンガリー人が取り囲んでいる。これ

をどうするのかということが、東ヨーロッパの安定を維持するための最大の問題です。いまのところはうまくやっているといます。スロバキアの事情でスロバキアとハンガリー間で多少もめておりますが、何とか最悪の事態にならずに来ています。ここで得られたことをモンゴルでもやってみるということです。将来モンゴルでこういった事件が起こりそうなときに、いいノウハウとして役立ちます。外の我々としてもモンゴルがそういう状況なんだと国際会議を開いて、アテンションを集めてやると思います。それと同様に、アルバニアとマケドニアなどとの間で同様のアルバニア人の問題がありますし、アゼルバイジャンとイランの間でもあります。ウイグルの問題もあり、いろいろな問題が合わさって存在しています。

この辺の少数民族の問題はソ連がつぶれるときに大きな役割を果たしたのですが、中国のことを考えるときに、周辺の少数民族がどういう分布になっていてどういう動きをしているのか、それがどう結びつくのか。たとえばウイグルとチベットの分離派がいま協定を結んでおりますが、そのチベットとモンゴルがラマ教で結びつく。それから中国の中、モンゴル本国、ロシアの中のブリアートというようにつながっていく。こうした関係プレーは、いくらでもできるわけです。それを積極的な形でどう利用していくのか。早く動かなければ石油のゲームとからみ、とんでもないことになるのではないかとこの危惧をもっています。

国際開発センター・高瀬氏

2つ質問があります。1つはカザフスタンとキルギスタンはまもなく小ロシアの中に組み込まれる公算が強いというお話でしたが、そうなった場合とならない場合で、ここへの援助の意味は変わるのでしょうか。実はアジア開発銀行が昨年12月にこの2国に対して3000万ドルの農業プログラム借款をしています。アジア開発銀行がこのような

ことを知らないはずはないんですが、今後どうなるかわからなくても援助をしていいのでしょうか。

もう1つは、モンゴルは日本が相当システマティックな協力を始めていますが、万が一中国が入ってきたとしても、日本としては協力をしていてもいいのでしょうか。

秋野

非常にむずかしい問題です。カザフスタンとキルギスタンがロシアの中に入るかどうかという問題は、これからの大統領選挙によって変わってきますが、ロシアがこれらとどういうふうに関組んでいくのか。国家と国家で経済主体にして組んでいくか、もう少し民族的なスラブ的な要素を中心に組んでいくかと思います。

その1つのキーはやはりウクライナだと思います。ウクライナを取り戻さないかぎり、ロシアは大きくなれないと思います。ウクライナの中心部分を取り戻したときに、ロシアは大国としての発言力をはっきり持って、それに応じた行動をしていくと思います。しかしウクライナを取るとかなり満足すると思います。取れないと不満なので、今度は下に行くということも考えられます。そういった組み合わせによっていろいろ変わるわけですが、基本的にはいままでのタイプの援助であるかぎりはやるべきだと思います。むしろ抑えることによるマイナスの方が大きいと思います。いまはまだカザフスタンとキルギスタンが、ベラルーシとロシアの関係までいくかどうかかわからないと思います。「やはり独立すべきだ、ベラルーシのようになってはいかん」という議論がトップ自身の口からも出ています。

しかしモンゴルの場合は、ちょっと違うと思います。国際的にかなりはっきりと「ここは中立地帯として保障し、援助すべきである」という枠組みができないと、中国で起こった波はもろにモン

ゴルにいくと思います。ミクロ面に目を向けてモンゴルと中国の合弁企業のあり方を見ると、ロシアやアメリカとの合弁企業とは違い、中国側が搾取し、モンゴルに益をもたらさないような傾向があります。

モンゴルの対外経済政策自由化を迫るときに、世銀なりIMFなりがそういう圧力を加えるわけですが、実はその担当官が中国人だったりするわけです。そして中国に有利なようにもっていったまう。しかしモンゴル側では恐いので何も言えない。そういうときに日本が「ここはおかしい」ときちんと言ってやるというような中身の部分も必要だと思います。何よりもモンゴルに防衛、治安などの教育を、いま考えているような1人2人ではなく、年に10人でも20人でもいいからやってやるべきです。そういう形で経済を超えた国家経営の部分の手助けをすべきでしょう。それらは非常にドラマティックに効果をもたらすと思います。

そのためにはやはり「どこを組んで誰と対抗して何をするのか」という方向性が、モンゴルにとっては必要です。中央アジアに関しても、日本としてやれることはやるということも1つの方策ですが、いざとなったらどこを組んで誰と対抗するのかを考えてやる必要があると思います。

さくら総合研究所・藤本氏

モンゴルに非常に関心をもっています。先ほどおっしゃったハンガリーモデルについてもう少しご説明いただけますでしょうか。

秋野

ハンガリーは第一次大戦、第二次大戦共に負ける側につくという悪い星の下でここ数十年国家経営をしておりますが、それにもとないハンガリーとして本来主張できる領土、自国民が相当各国から切り取られた形になっております。数からいくとハンガリーはいまは小国と言える経済しかない

し、そういう外交しかありません。しかし歴史的に本来のハンガリーというのは、もっと大きな国としての力があるわけです。ポスト冷戦で、よく考えるとハンガリーに対して不正義が行われていたという状況が、後にどういう形で吹き出してくるのが1つの問題でした。冷戦時代には社会主義国の1つの連帯の中で埋もれていたわけですが、社会主義がつぶれるとやはりナショナリズムが出てくるわけで、その中でいろいろな問題も出てきます。スロバキアの場合では言語の表記をどうするのか、行政区の割り方、ゲマンダリングの問題、切り方の問題ですね。そういった問題が出てくる。また、ルーマニアにおけるハンガリー人の問題、これもチャウシェスクの時代からかなり弾圧されておりまして、チャウシェスクが没落する元の原因にもなったティミショアラもやはりハンガリー人の町です。またボイボディナ、セルビアの上の部分ですが、ここでも問題がある。これが連帯で動いた場合に、中央ヨーロッパの秩序を壊してしまうのではないかという危惧があったわけですが、欧州会議を中心にあの辺を1つの地帯

ととらえ、国境を通り抜ける制度をたくさん作り、あらゆる文化交流や経済交流をしました。国家の枠を少し低めて地域の枠を前面に出して、地域全体をマネージしていこうというアイデアです。それによって二国間条約、条約ネットワークなどいろいろなものができて安定化に進み、ある程度成功していると言っていると思います。

モンゴルではまだそこまで行っていませんが、この事情からするとロシアの状況、もしくは中国の状況に変化があった場合に、連動して動くだろうと予想され、そこにウイグルやチベット・ラマ教の問題がからむだろうと思います。そうなること起こってからでは遅いですね。したがって、そういう問題が起こりうるんだとアテンションを集めるような国際会議を、何とか日本の力で開いてやりたいと思います。そのときに何も無いところからやるのではなくて、ハンガリーという成功例があると。ハンガリーでなぜ成功したのか、その専門家を連れてきてモンゴルも入れて会議をやるというのが、知的な支援としてかなり意味があると思います。

